

(第3種郵便物認可)

# 一栄谷の 私見 異見



日欧EPA交渉が大  
体合意した。日欧間で  
関税がなくなる貿易品  
目は全体の95%超とな  
り、TPPと同程度の  
高い自由化水準になる  
とともに、日欧EPA  
は、世界の人口の8・  
6%、GDPの28・4  
%、貿易総額の38・8  
%をカバーすることか  
ら、TPPや東アジア  
地域包括的経済連携  
(RCEP)と並ぶ自  
由貿易圏の誕生と確し  
たられる。

その実態は、アメリ  
カのTPP離脱とイギ  
リスのEU脱退を受け  
て、日本、EUともに  
保護主義の流れを断ち  
切るため、まずは意  
外きで交渉はすめ  
られたものだ。日本農  
業にとってメリットは  
限られ、ソフト系手  
入りの大幅開放や、豚肉  
での低価格帯にかける  
従量税の引下げ、セ  
ブガードの発動要件の  
変更をはじめとして、  
デメリットはきわめて  
大きい。

合意ありきにもな  
らう大幅譲歩に加えて、  
TPPですら公表した  
影響試算が今回は否き  
られなかったことが腹立  
たしい。国内対策の効  
果を見込んで経済効果  
や影響を試算し、対策  
をまとめた後に農業へ  
の影響分析を公表する

方針であるという。し  
かも影響分析には数値  
を含めない方向で調整  
されているとも伝えら  
れる。早期合意をはか  
るには国内での議論を  
極力抑えるのが得策と  
あるとしているとしか  
思えない。判断は政府  
に任せ、国民は政府の  
言うことを聞けとい  
い、と言わねばなら  
ない。国民、農業者を愚弄す  
るにも程がある。

ところで日欧EPA  
にもなつて懸念され  
る一つにワインがあ  
る。既にブドウの産地  
では生食用は需要が飽  
和状態にあることが  
ら、ワイン用ブドウに  
一条の光を見出して、  
これへの生産転換が増  
えつつある。一方ウ  
イングラムもあつて  
ワイン需要は増加して  
いるものの、コンビニ  
等に並んでいるのはチ  
リ産、南アフリカ産等  
の輸入物ももつぱら  
で、国産ワインを見か  
けることはままない。  
こうした流れの中で、  
国産ワインは高級化を  
高めてきた。こうし

## 日欧EPAと 国産ワイン

た動きを象徴する一つ  
が一升瓶入りのワイン  
の減少である。特に山  
梨県では地元の人たち  
が飲むワインはもっぱ  
ら一升瓶であったが、  
その一升瓶が消えつつ  
ある。勿論、750ml  
ボトルへの切り替を  
併行して、近時、ワイ  
ンそのものの味や品質  
の向上も著しく、これ  
らを礎子にして単位当  
たりのワイン価格の引  
き上げを実現してきた。  
このように高級化路  
線に生残りをかけてき  
たが、日欧EPAの発  
効によりフランス産や  
イタリア産等との競合  
が激化することは必至  
である。今後は高級化  
だけでなく、味・品質  
の差別化による食文化  
との融合が課題とな  
る。既にイタリアの  
オーナーたちはリスト  
ラン等との提携を強め  
るとともに、ワインツ  
ーリズムを開催して愛  
好家にワインリマまで  
足を運んで試飲しても  
らうことによつてフ  
ランを獲得していく  
等、懸命の努力を重ね  
ている。

高級化路線、差別化  
路線は、ワインにとど  
まらず日本農業の生き  
残りにとって数少ない  
方策の一つである。で  
はあるが、一升瓶ワイ  
ンの減少も含めて、地  
域に根付いた食文化が  
失われていくのは寂し  
い。価格以上に、地域  
の農業・食文化を積極  
的に評価し、生産を支  
持してくれる消費者の  
存在の有無が命運を左  
右する。日本農業はそ  
こまで追い込まれてい  
る。(農的社芸学サイン  
研究所代表)